

国家権力犯罪に“時効”はない

『検証 レッド・ページ70年』を読んで 感想と意見

2020年12月31日付で発行した『検証 良心の自由 レッド・ページ70年 新聞の罪と居直り—毎日新聞を手始めに』は、弾圧犠牲者のご家族、本会会員はじめ、憲法擁護のために活躍されている学者、弁護士、ジャーナリストのみなさんなど約350人にお届けしました。感想・意見を頂戴しましたので紹介します。

あの頃に戻らせないために

竹下 南 (小林登美枝さん二女)

この度は「検証 良心の自由 レッド・ページ70年 新聞の罪と居直り—毎日新聞を手始めに」をお贈りいただきありがとうございました。

私どもの父小林勇、母小林登美枝における「レッド・ページ」についても取り上げていただいておりますが、このことを知ったらどんなに喜ぶことでしょうか。さっそく報告いたしました。

貴運動の一つである「レッド・ページによる被害者の名誉回復と国家賠償を求める請願運動」は両親の終生宿願となっていたテーマと重なります。それらは今もって成就されておらず、この度の検証作業の一環に加えていただきましたことに両親になりかわり感謝申し上げます。

さっそく拝読させていただきました。当時全国で3~4万人ものレッド・ページ被害者がいて、たよりであるはずの労働組合が「仲間である被害者を切り捨てた」という現実。読み進める中で、夫婦揃って国家権力によって突然人生の先行きが閉ざされてしまった二人の無念さが今さらながら強く伝わってまいりました。

レッド・ページについては、昔から父母の会話に登場しておりました。しかしながら子どもにとっては決して楽しい話ではなく、積極的に質問したり話を掘り下げて聞くということはありませんでした。(レッド・ページネタはよく夫婦喧嘩にも……) 今、思えばもっと寄り添い丁寧に深く話を聞いておけば、と悔やまれます。

関千枝子様、明珍美紀様にも、どうかよろしくお伝

えくださいます。

これからどのような世の中になるのでしょうか。あの頃に戻らせないために、皆様の一層のご活躍をご祈念申し上げます。

GHQ権力のすさまじさと日本の弱腰

薦 信彦 (毎日新聞OB)

「検証 レッド・ページ70年」ありがとうございました。薦家の関係者(妹2人、長男、長女)はみんな喜んでます。昔の本が今日によみがえるとは思ってもいませんでした。それにしても昔のGHQの権力のすさまじさと日本の弱腰には驚くばかりです。

父の本を久しぶりに読み返し、私にも懐かしい思いがしました。いい本を書いておいてくれたと感じています。大住さんによろしく。

同じ過ち繰り返さぬ「武器」に

澤田 猛 (毎日新聞OB)

かつて新聞社にもレッドページの嵐が吹き荒れたことは知ってはいたが、今回出版された『検証 良心の自由 レッドページ70年』を読んで、レッドページで新聞社を追われた仲間たちのことを考えると、これまでレッドページの実相を知らなかったことに忸怩たる思いがする一方、新聞社に30年以上在籍し、ブン屋稼業をしてきた者にとって、この本にはまさに衝撃的な内容が記されていた。

敗戦後の占領下でレッドページ当時のマッカーサー書簡は日本国憲法で定められた内容をはる(2面へ)

(1面から)かにしのご超法規的なものだったにしても、当時の新聞社の労働組合、毎日新聞労組を含め、社を追われていく仲間たちに、労組として救済や援護の手をなぜ差し伸べられなかったのか。米国サンフランシスコで調印された対日講和条約が発効し、それまで日本をワシブかみにしてきた占領軍の最高司令官マッカーサーから解き放たれ、晴れて「独立」した後においてさえ、解雇通知を理不尽な形で突き付けられ追われていった仲間たちに、労組はなぜ彼らの人権を回復させ、救済・援護しようとする取り組みをしなかったのかと慄然とした。いったい誰のための組合なのか。怒りが込み上げてきた。

毎日新聞の場合、社を追われた人たちは49人。このなかに私が毎日新聞の入社に先立ち、お世話になった方がいた。『レッドパージ70年』のなかに、たびたび名前が出てくる「田村五郎」という方だった。私は最初の入社試験で筆記試験はパスしたものの面接試験で落ち、いったん社会人になった後に再度、毎日入社試験に挑戦するとき、ツテを頼って先輩記者の話を聞いておこうと、田村さんを紹介され、JR渋谷駅近くにあった東急沿線新聞社を訪ねた。田村さんは当時、同社の代表を務めていたように記憶している。

田村さんにその後、お会いしたとき、「毎日新聞の政治部にいて、たまたま代々木担当（渋谷区代々木に共産党の党本部があり、この場合、代々木といえば共産党を意味する）をしていたことが、レッドパージで会社を解雇された理由だな」「戦争中は陸軍の報道班員としてビルマ（現ミャンマー）に赴き、暑い中なかで仕事をしていたよ」と記者時代を振り返った。古巣の毎日新聞に対する恨み節は一切なく、その穏やかな語り口が今でも印象に残っている。

田村さんと同様に社を解雇された鳶信正さんの裁判所に提出された陳述書を読めば、レッドパージで解雇通告を受けた人たちがマッカーサー書簡によって、会社を生かすために生けにえにされた被害者だったことが分かる。鳶さんのご息が同じ毎日の先輩記者である信彦さんであること、そのご尊父が田村さんとともに、東急沿線新聞社を創立したことも、この『レッドパージ70年』を読んで初めて知った。

毎日への再度の入社試験で採用が決まったとき、田村さん宅にお礼を兼ねて毎日入社の報告にお邪魔した。その後は毎年、年賀状を出すだけで、再びお会いすることはなく、ある年にご家族から田村さんが旅立たれたご訃報の葉書をいただいた。私事にわたるようなことはここで打ち止めにしたい。

『レッドパージ70年』はマッカーサーという強大な権力を前にして、会社ばかりか労働組合までもが絡め取られた。会社側はともかく、「独立」後においてさえ、不当に解雇された仲間たちを救済・援護することを顧みなかった当時の労組の一番痛いところを突いて

いた。

最後にもう一言。過去の過ちをきちんと検証しておかないと、同じような過ちを将来、再び犯すというのが世の常だとしたら、かつてのレッドパージのなかで解雇された仲間たちに見せた労組が、将来あるかもしれない超法規的な権力からの弾圧に対し、同じ過ちを無反省に再び繰り返す恐れがないと誰が確信を持っていえるのか。『レッドパージ70年』はそんな風にも読めてくる内容だったし、そういう警鐘を鳴らしているようにも思えた。

それだけにレッドパージの検証はかつての轍を踏まない、新聞を含めたメディアが権力に抗っていく「武器」にもなる。丸い卵も切りようによっては四角に切れる。問題はどのようなメスの入れ方をするか、どういう向き合い方をするかだと思う。『レッドパージ70年』はそうした問題提起を私たちにしてくれていると受け止めたい。

と同時に、『レッドパージ70年』は分厚い本であるうえに、手に渡る読み手は自ずと限られているのが残念。僭越ながら原稿の量を厳選した上、その内容に膨らみを持たせ、写真のほか図表や地図などを加えてビジュアル化し、多くの一般読者の手に渡るよう、お手ごろな値段の単行本化をご検討していただきたい。良い本が必ずしも一般読者に届くとは限らない。そこはご工夫を。内容が濃く、考えさせられる問題が多いだけにモッタイナイ！

『レッドパージ70年』出版の企画、制作、編集に携わった方々、ご苦労さまでした。

レッド・パージは国家的な犯罪行為

梁田 政方（北海道大学OB）

いまこの時期に「レッド・パージ」について、まだ解明されていない多くの分野に光をあて、改めて究明するとともに、そこから導きだされる教訓を今後の労働運動・大衆運動に生かしていくことは大いに意義あることだと思います。それほどレッド・パージには多くの問題がかくされていると私は思っています。

私自身が経験したことだけをあげても、東宝争議、国鉄職場放棄闘争、北大イールズ闘争、三菱下丸子、東急労組、富士重工三鷹工場、文京区共同印刷工場など多くの分野にわたっています。

しかし、レッド・パージは、直接朝鮮戦争に結びつき、下山、三鷹、松川、それに私の考えでは白鳥事件なども含めて多くの謀略事件をその背景にもつ国家的な犯罪行為だと思います。

当時、私も含めてレッド・パージの犠牲者は大きな苦労を重ねました。私たちは今、その犠牲の上で闘いを引き継ぎ、さらに闘っているのだと思い（3面へ）

レッド・パーージは憲法違反です

日弁連と各地弁護士会は
すべての被害者を救済するよう
政府に勧告・警告しました

(2面から)ます。あの頃の純真な気持ちに立ち戻って、今後この国のあり方について論じてみたいと気がしないではありません。

もっともこの年齢(93歳)になつては気持ちはあつても成し遂げることは到底不可能ですが……。

いずれにしてもまとめていただいたこの貴重な記録を読み返し若き血をたぎらせたいと思います。

(千代田区労協のある)神田三崎町は懐かしい所です。まだ周囲は焼跡でその中の一つだけ小さな土蔵がありました。そこが印刷出版の労組事務所でした。そこにたむろして近くにあった炭労本部の大会の動向を見守っていたことを思い出します。1952年のことでした。この炭労大会で武藤委員長が失脚、総評代表も解任になりました。総評がニワトリからアヒルになる一つのきっかけでした。私にとっても本格的に労働運動に目覚めるきっかけになった大会でした。

レッド・パーージが新聞界を襲った意味

関 千枝子(毎日新聞OB)

「検証 レッド・パーージ 70年」ありがとうございました。大住さんが「70年」にこだわり、どうしても2020年中に出すという覚悟らしいので、そんなの無理じゃない?と思っていたのですが、さすが剛腕・大住、改めて感心しました。

池田一之さんの記事、覚えている人もなく、なかなか見つからないと聞いて心配していましたが、時間がかかったけれど、見つかって良かったです。でも当時、毎日新聞をやめている私が「(池田さんは)よくレッド・パーージのことを書いたな」とびっくりしたのに、大勢の方々が全く記憶しておられなかったこと、ショックでした。

とにかく、小林登美枝さんも、池田さんの取材をとっても喜んでおられたので、小林さんの晩年に、よく声をかけていただいた後輩として、この冊子ができたことうれしいです。

私、ほかの新聞社でパーージにあい、本当に苦しんだ人知っています。レッド・パーージがまず新聞界をおそったこと、その意味を今の方々がもっともっと知るといいですね。「70年」と言うのは大変な年月ですから。

私が大学に入ったのもあの年。学内はレッド・パーージ反対のデモがうずまいていました。大学の闘争、いろいろあったけれど、大学はレッド・パーージをくいとめたのですから。

(関千枝子さんは去る2月21日、88歳で永眠されました。小林登美枝さんに関する貴重な証言と、池田一之記者の記事があることを教示くださいました。ご冥福をお祈りします)

思想、良心、表現の自由を守る糧に

増本 一彦(治安維持法犠牲者国家賠償
要求同盟中央本部会長)

宮澤弘幸氏等に対する謂われない言語道断の弾圧所業の事実は、北海道組織の報告によって、皆さんの運動を通して知ることができ、北海道大学に対する宮澤氏への謝罪と名誉回復と顕彰の事業にも多少の協力をさせていただいてきました。

治安維持法下の侵略戦争と植民地支配の阻止、平和と自由・人権保障の確立を求めた闘いと抵抗は、多くの良心的な人々に影響を与え、これがポツダム宣言第10項後段の「日本国政府は日本国民の間に存する民主主義的傾向に対するいっさいの障害を除去すべし。言論、宗教、思想の自由並びに基本的人権の保障は確立せられるべし」の規定となって、後の日本国憲法の礎としての国際的承認を獲得したのです。

そして、敗戦後は、彼ら弾圧犠牲者等と平和と民主主義の実現に奮闘した国民大衆が国際的な援助も受けて日本国憲法を確定したのでした。

レッド・パーージは、この日本国民大衆の獲得物を真逆に否定するものであり、戦前・戦中から生命を賭して闘い抵抗してきた治安維持法犠牲者等と(4面へ)

(3面から)戦後の『日本の平和的・民主的再建』のために活動してきた日本国民大衆の解放闘争の歴史に対する重大な挑戦でありました。

しかし、日本国民は「不屈」にレッド・パーージ攻撃を克服してきております。レット・パーージから70年と言う長い時間が経過していますが、「市民と野党との共同」の世論と運動がようやくしる発展しつつあり、色々な反動攻勢もあるでしょうが、今後の努力では、治安維持法犠牲者等への名誉回復とともにレッド・パーージ犠牲者等に対する名誉回復も実現できるようになるでしょう。

植田泰治氏らの映画製作の活動も進んでおります。皆さんが編集・制作されたこの「レッド・パーージ 70年」が、思想・良心・表現の自由を守り発展させる諸活動の大きな学習の糧となると思います。

私も、この書籍の普及に微力ですが、お役に立てるように努力したいと思います。

レッド・パーージの残り火は消えていない

渡辺眞知子 (東京女子大OB)

『検証 レッド・パーージ 70年』をお送り下さいます。まことにありがとうございます。いわれのない誹謗中傷による苦難の人生が織り込まれた本書を読むには、大きな気力を要しました。私の遠縁にあたる人も、レッド・パーージに遭い、日本放送協会を去って、険しい道のりを歩んだと聞いています。

私は、放送局で番組を作っていた弟が自死して信仰を持ち、日本聖書神学校(東京・目白)に入学しました。私の傍らにあった『イエス・キリスト』(1966年三一書房)の著者・土井正興氏が、26歳で毎日新聞を解雇されていたことを初めて知りました。土井正興氏の長女すみれさんの告別式の司式をされた牧野信次牧師は、旧知の方でもありました。

今私は、(私の母校でもある)東京女子大在学中に3・15事件(1928年)で逮捕され拷問を受け、24歳でその生涯を終えた伊藤千代子を描く映画製作を支援しています。

当初映画製作に好意的だった友人は、伊藤千代子が共産党員だったことを知ると態度が変わり、気がついた時には友人関係そのものが消えていました。

ちまたで話題になっている「共産党さんは、やっつては素晴らしいんだけど、党名がねぇ…」という話も同様で、レッド・パーージの残り火は、70年を経た今でも消えてはいません。否、大きく燃え上がるその時を待っているかのようでもあります。

この良書が多くの人々の心ある読者に届き、公正・正義・平等という普遍的な価値に開かれた社会になりますようにと祈り願っています。

<コラム> 冤罪忘れるな! ⑤③

アメリカ人家族の目

『日本を写す小さな鏡』

レーン夫妻の4女・ヴァージニアの夫アール・マイナーの著作。長めの序文で、夫妻と家族の受けた冤罪被害の概略を織込み、日米戦争を挟んでも切れることなかった個人同士の絆に目を向けている。個々の事実関係では正確さに欠ける部分もあるが、アメリカ人家族が事件をどう受け止めたのか、貴重な記録となっており、著作自体を夫妻と日本人に捧げてみいる。



1987年9月30日、北大同窓生が主催したレーン夫妻偲ぶ会に出席したレーン家の6人の姉妹

原文は英文(A Little mirror of Japan)ながら最初から日本語訳での出版を企図、英文学の吉田健一訳で1962年筑摩書房から発刊された。著者は京都に住むなど訪日経験篤く、日本人および日本文学に堪能で日本人論としても目から鱗、楽しく読める。半面、耐え難い冤罪を挟みながら日本永住を果たしたレーン夫妻の心奥に培われた日本観を、図らずも本著が明かしているといってもよく、日米にかかる事件の位置づけを知るうえで欠かせない一冊となっている。



「スパイ冤罪事件」の真相に迫る決定版(本会編)

『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』花伝社刊

第1部=冤罪の真相 第2部=冤罪事実の条条検証
資料編=判決全文、軍機保護法全文、年表
特別添付=重要事項索引

申し込みは本会事務局までFAX・メールで(1面上部題字横に掲載)。送料税込み2300円。後払い。

【事務局から】 2020年はあの敗戦から75年目でした。戦争体験者が年々少なくなっていく中で、多くの新聞は「戦後75年」企画を展開しました。しかし70年前に新聞・通信・放送49社、701人が「問答無用」で職場を叩き出されたレッド・パーージについての発掘・検証はほとんどありませんでした。毎日新聞を追われた篤信正さんが遺した資料がきっかけになって刊行したのが「検証 レッド・パーージ70年」です。ほぼ1年間、大住広人さんが資料発掘と執筆に集中してくださいました。被解雇者の残酷を明かにし、新聞経営者たちの責任追及はまだまだです。本書がその第一歩になることを期待しています。(福島 清)